

近代朝鮮における中国農民の野菜栽培に関する研究

——京畿道を事例として——

李 正 熙

【要約】 本稿は在朝中国農民の野菜栽培の実態について、朝鮮開港期から一九二〇年代までの時期を対象に京畿道を中心に考察するものである。まず、中国農民の野菜栽培面積、野菜生産額の推計を行った上で、中国農民は大都市及び地方の主要都市の野菜供給において高い比重を占めていたこと、それに対して朝鮮人と在朝日本人が警戒感を抱いていたことを明らかにする。次に、なぜ中国農民が野菜栽培において相当な勢力を形成するに至ったのかを探るために、その生成過程及び中国農民の朝鮮移住の背景について分析を行った後、中国農民生産の野菜が朝鮮及び在朝日本農民が生産する野菜より割安で品質が優れていた原因について、中国農民の野菜生産の特徴、販売ネットワークを中心に分析する。最後に、以上の考察結果が朝鮮近代史及び朝鮮華僑史に示唆することは何かについて検討する。

史林 九四卷三号 二〇一一年五月

はじめに

野菜は鮮魚とともに人々の日常生活に欠かせない生鮮食料品であり、特にキムチを常食する朝鮮人にとって、その食材である白菜、ニンニク、大根、唐辛子などの野菜は食生活において必須不可欠な食料品である。

朝鮮における野菜栽培の歴史は非常に古く、とくに一五世紀に刊行された農書『四時撰要抄』と『山家要録』には、朝鮮の風土に合う独特な野菜栽培技術が詳細に紹介されていることを考慮すれば、古くから野菜栽培が盛んに行われていた

ことがうかがえる。一七世紀半ばより漢城（現在のソウル）近郊には同地での膨大な野菜消費を目的とした商業用の野菜栽培を専業とする地域が形成され始め、一八世紀後半までには南大門、西小門、東大門の周辺、梨峴、鐘樓、七牌に野菜市場が出来た。^②

しかし、朝鮮における野菜生産の商業化が進み、野菜生産が急増したのは、近代に入ってからである。朝鮮開港期（一八七六年「開港」から一九一〇年「韓国併合」以前までの時期）の野菜生産に関するデータがないため、植民地期で見れば、朝鮮の野菜生産額は、一九三四～一九三六年の平均価格に換算した場合で、一九二二年に二、三三三万円、一九二〇年に三、九五九万円、一九三〇年に四、八二〇円、一九四〇年に五、七〇六万円に増加し、一九四〇年には一九二二年より約二・六倍の生産額増加をもたらした。^③ なお、朝鮮の農産物生産総額に占める野菜の比重は、一九二二年に三・六％、一九二〇年に五・一％、一九三〇年に四・八％、一九四〇年に五・七％を各々占め、全体的に増加の推移を見せている。これらの数字によって近代朝鮮には野菜生産において何らかの変化が生じていることが見て取れるが、この変化に着目した朝鮮近代史での研究は非常に乏しい。

宮嶋氏^④は、甲午改革以後の朝鮮開港期の農村経済の実態について、農作物の商業的發展という観点から分析する中で、農家の野菜栽培の商品化が穀物の商品化とともに進んでいたと簡単に言及しているが、具体的な分析までには至らなかった。近代朝鮮の野菜栽培における変化に注目した最初の研究は朴氏^⑤によってなされた。朴氏は一九三〇年代の工業化・都市化による野菜需要の増加に、朝鮮農民がどのように対応して、野菜栽培の拡大を図ったかについて分析を行った。朴氏の研究では、工業化・都市化によって米穀や豆類よりも野菜などの新興の商業的部門に対する需要が増加したこと、その結果として野菜などの生産が増加したこと、市場の変化に対する農民の独自の対応が生産の増加に相当の影響を及ぼしたこと、を明らかにした。

ところで、近代朝鮮における野菜栽培は朝鮮農民のみならず、日本農民及び中国農民によっても行われていた。植民地

期朝鮮の農業研究によく引用される『朝鮮農業発達史』には、朝鮮農業発達における日本農民の寄与を述べた上で、「素より朝鮮農業発達途上に於ける支那人農業経営者の存在も、等閑に附し去り難い事実には相違ない。即ち彼等が朝鮮に於て農業、殊に蔬菜の栽培に従事してをる歴史は内地人に比して古いものがある」と、野菜生産における中国農民の役割を評価していた。なお朝鮮人及び在朝日本人は後述するように在朝中国農民の都市部に対する野菜の独占的な供給に警戒するほど一大勢力を形成していた。

しかし、中国農民の野菜栽培を朝鮮近代史から捉えた先行研究は皆無に等しい。高氏は中国人の朝鮮移住を社会史的に分析する中で植民地期の中国農民の人口は急速に増加したこと、主に野菜栽培に従事していたことを簡単に紹介している。一方、朝鮮華僑史では、楊・孫氏^⑨によって中国農民が主に京畿道、平安南道及び平安北道に多く居住し、とりわけ仁川及び富川一帯（以下、富仁地域）で野菜栽培を盛んに行っていた事実だけが明らかにされている。

中国農民の野菜栽培は朝鮮近代史のみならず朝鮮華僑史において説明すべき重要な研究課題の一つである。一九三〇年一〇月に朝鮮総督府によって実施された国勢調査によれば、在朝中国人の有業者七万二、九五〇名のうち、商業従事者は全有業者の三四％、鉱工業従事者（ほとんどが労働者）は三一％、農業従事者は一七％で、農業従事者は三番目に多く、中国農民は在朝中国社会及び経済に主要な一翼を担っていた。すなわち近代在朝中国人の全体像を明らかにする上で、中国農民の実態に関する説明が求められよう。しかしながら朝鮮華僑史における在朝中国人に関する先行研究は職業別に見るならば、商業に関する研究が圧倒的に多く、労働者、製造業に関する研究は一部あるのみで、農業に関する研究は皆無である。

そこで、本稿では在朝中国農民の野菜栽培の実態を明らかにすることを研究課題とし、京畿道を事例として取り上げ、以下の三点を中心に議論を進めることにしたい。

I 朝鮮の野菜栽培及び生産における中国農民の位置づけを行う。

Ⅱ 中国農民の野菜栽培の生成過程と朝鮮移住の背景に関する考察を行う。

Ⅲ 中国農民の野菜栽培の特徴及び販売網を明らかにする。

以上の点を通じて在朝中国農民の野菜栽培が朝鮮近代史及び朝鮮華僑史に示唆することは何かについて、考察したい。

- ① 이호철 『山家要録』의 野菜技術과 冬節養菜（韓国農業史学会編『朝鮮時代農業史研究』（国学資料院、二〇〇三年））。
 - ② 金遇容 『韓末・日帝初서술의 都市行商（一八九七—一九一九）』（서울학연구全編『서울학연구』第二九号、二〇〇七年）六頁。
 - ③朴翊 『農業成長』（安秉直編『韓國經濟成長史』（서울대학교出版社、二〇〇一年）七六頁）。
 - ④宮嶋博史 『朝鮮甲午改革以後の商業的農業——三南地方を中心に——』（史学研究會編『史林』第五七卷第六号、一九七四年）五〇頁。
 - ⑤朴ソプ 『一九三〇年代朝鮮における農業と農村社会』（未来社、一九九五年）二七—六四頁。
 - ⑥本稿では、中国農耕業主とその農耕業主に雇われた中国農夫をあわせて中国農民と称する。なお、中国農夫の中には日本農耕業主に雇われていた者もいたが少数であった。
 - ⑦小早川九郎編『朝鮮農業発達史 発達篇』（朝鮮農會、一九四四年）一〇頁。
 - ⑧高承済 『華僑對韓移民の社会史的分析』（『白山學報』第一三三号（白山學會編、一九七二年）一六三—一六五頁）。
 - ⑨楊昭全・孫玉梅 『朝鮮華僑史』（中国華僑出版公司、一九九一年）二〇八—二〇九頁。
 - ⑩朝鮮總督府 『昭和五年朝鮮國勢調査報告全鮮編 第一卷結果表』（朝鮮總督府、一九三三年a）二四六—二四七頁。
 - ⑪最近の主要な研究成果は以下のようであるが、朝鮮開港期に集中し
- ており植民地期の研究成果は相対的に手薄である。浜下武志『十九世紀後半の朝鮮をめぐる華僑のネットワーク』杉山伸也外編『近代アジアの流通ネットワーク』（創文社、一九九九年）。古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』（東京大学出版会、二〇〇〇年）。孫科志『甲午戦争前朝鮮華商初探』『東北亞僑社網絡與近代中國』（中華民国海外華人研究學會、二〇〇二年）。石川亮太『朝鮮開港後における華商の対上海貿易——同順泰史料を通じて——』（『東洋史研究』第六三卷第四号（東洋史研究會、二〇〇五年）。姜珍亞『広東네트워킹과朝鮮華商同順泰』（『史学研究』第八八号（韓國史學會、二〇〇七年）。拙稿『近代朝鮮における山東幫華商の通商網——大手呉服商を中心に——』（『神戸華僑華人研究會創立二〇周年記念誌』（神戸華僑華人研究會、二〇〇八年））。
- ⑫堀内稔『赴戦江水電工事と中国人労働者』『むくげ通信』一八三号（むくげの会、二〇〇〇年）。松田利彦『近代朝鮮における山東出身華僑——植民地期における朝鮮總督府の對華僑政策と朝鮮人の華僑への反応を中心に——』『千田稔編『東アジアと「半島空間」——山東半島と遼東半島——』（思文閣出版、二〇〇三年）。拙稿『朝鮮開港期における中国人労働者問題——「大韓帝國」末期広梁灣塩田築造工事の苦力を中心に——』（『朝鮮史研究會論文集』第四七集（朝鮮史研究會、二〇〇九年a））。
 - ⑬拙稿『近代朝鮮華僑製造業研究——以鑄造業为中心』『華僑華人歴史研究』二〇〇九年第一期（総第八五期）（中国華僑華人歴史研究所、

第一章 中国農民の野菜栽培及び生産の状況

在朝中国農民の戸数及び人口は、朝鮮内排華事件及び満洲事変が起こった一九三二年、および日中戦争が勃発した一九三七年を除いて増加する推移にあった。日本帝国主義による「韓国併合」直前の一九〇八年には一四六戸・五二四名であったのが、一九一〇年には三七四戸・一、四二七名、一九三〇年には三、三三一戸・一万三、四八九名、一九四三年には四、四三八戸・二万三、一一九名に達した。特に一九四三年の中国農民の戸数及び人口は近代朝鮮において最高であり、同年での日本農民の戸数及び人口五、九七七戸・二万八、九三三名に迫るものであった（表一参照）。中国農家の戸数が在朝中国人の戸数に占める比重は、一九一〇年には二二・一%、一九三〇年には一九・九%、一九三五年には二〇・三%、一九四三年には三〇・五%を占め、農業は在朝中国人の主要な経済活動の一つであったことがここでも確認される。

しかし、中国農民が朝鮮の全農民の中で占める比重は、中国農民の人口が最も多い一九四三年でも全戸数の〇・一四%に過ぎず（日本農民は〇・一九%）^①、朝鮮農民が圧倒的に多かった。しかし、中国農民の戸数は朝鮮全体の農民戸数のなかでは僅かであるが、その戸数のほとんどが野菜栽培を行っていたことに注目する必要がある。

一九三〇年の国勢調査によれば、中国農家三、四五七戸の内訳は、米作に従事する農家は自作、小作、自作兼小作を合わせて九七名（戸）に過ぎず、「その他の自作業主」二二九名（戸）、「その他の小作業主」三、一〇二名（戸）、「その他の自作兼小作業主」一二名（戸）の合計三、三四三名（戸）はそのほとんどが野菜栽培を行っており、これは中国農家の九六・七%が野菜栽培を行っていたことになり、中国農家及び農民が主に野菜栽培に従事していたことが、ここで明らかに確認できる。

表1 近代朝鮮における中国農家の戸数及び地域別分布（単位：戸・名）

道 別	1908	1910	1915	1920	1925	1930	1935	1943
京 畿 道	50	206	160	226	352	472	267	188
忠清北道	—	4	4	12	26	47	29	11
忠清南道	—	20	32	52	75	105	54	22
全羅北道	10	20	42	58	81	174	97	44
全羅南道	—	8	13	10	26	58	30	29
慶尚北道	—	2	14	35	73	134	48	15
慶尚南道	1	3	7	6	22	24	14	2
黄 海 道	9	9	58	115	222	351	264	349
平安南道	44	43	129	185	319	452	305	759
平安北道	32	42	57	87	396	642	663	1384
江 原 道	—	5	9	6	21	68	44	20
咸鏡南道	—	12	65	92	208	354	352	635
咸鏡北道	—	—	25	82	222	450	470	980
中国人								
農家戸数	146	374	615	966	2,043	3,331	2,637	4,438
農民人口	524	1,427	1,769	3,654	7,120	13,489	11,707	23,119
総人口	9,978	11,818	15,968	23,989	46,196	67,794	57,639	75,776
日本人								
農家戸数	806	2,132	9,573	10,210	9,470	10,505	8,419	5,977
農民人口	2,613	6,892	35,453	40,868	39,533	45,903	37,321	28,933

出典：一記者「朝鮮問答」『朝鮮』第22号（朝鮮雑誌社，1909年12月）98頁、朝鮮総督府『朝鮮総督府統計年報』各年度（復刻版，高麗書林，1989年）、南朝鮮過度政府編纂『朝鮮統計年鑑一九四三年版』（南朝鮮過度政府，1948年）16～25頁・42頁より作成。

一方、朝鮮と日本農家が米作を行う比重は全体の七〇%と七四%であり、ほとんどが野菜栽培に従事していた中国農家とは主要な栽培農産物が異なっていた。同国勢調査では、朝鮮と日本農家が米作以外に何を栽培していたかに関してはデータが得られないが、米作以外を栽培する日本農家は一、一三九名^③（戸）に過ぎず、仮にその全てが野菜栽培に従事したとしても野菜栽培の中国農家は日本農家の三倍以上にもなる。

次に、中国農家の作付面積について検討を行うが、朝鮮総督府の野菜作付面積の統計は民族別に区分されていないため、今のところ断片的なデータを手がかりに推計するしかない。京畿道の場合、一九二三年頃の京城府及び仁川府を除いた地域での中国農家二四三

戸の作付面積は五八万七、九〇〇坪（戸当平均二、四一九坪）であり、一方、京城府の中国農家は一九二〇年頃では戸当約一町歩（三千坪）を耕作していた。^⑤

一九一〇年頃の鎮南浦府の中国農家五四戸の野菜作付面積は五万二、五〇〇坪で戸当九七二坪に過ぎなかった。^⑥新義州府における一九三〇年頃の中国農家の作付面積は、大規模の農家では五千〜六千坪、小規模の農家では二千〜三千坪であった。^⑦元山府では一九三四年頃では一、一〇〇〜四千坪であった。^⑧このように、中国農家の作付面積は地域及び時期によつてばらつきが大きく、小作料の關係により大体において都市部では狭く、農村部では広い傾向があり、一定していなかったが、約三千坪であったと推定される。

中国農家の作付面積が戸当一町歩だとすれば、表一の戸数に一町歩をかければ朝鮮内の作付面積を求めることができ、一九一〇年に三七四町歩、一九一五年に六一五町歩、一九二〇年に九六六町歩、一九二五年に二、四〇三町歩、一九三〇年に三、三三二町歩、一九三五年に二、六三七町歩、一九四三年に四、四三八町歩になる。朝鮮内の野菜栽培作付面積が一九三〇年に一五万町歩、一九三五年に一七万町歩であるため、中国農家の野菜作付面積が全体に占める比重は一九三〇年に二二％、一九三五年に一・六％になる。絶対的な比重はさほど大きくないが、中国農家が全農家戸数の約〇・一％に過ぎなかったことを考えれば、決して小さくない比重である。なお、後述するように、中国農家は野菜畑一枚に年に何回も野菜を栽培していたため、作付面積だけでは中国農家の野菜生産の状況を把握し難い。

中国農家の野菜生産額についても作付面積と同様に公式的な統計がないため、断片的なデータを手がかりに推定するしかない。一九一〇年頃の中国農家の年間生産額は反（三〇〇坪）当四〇・五円〜百円と見積もられ、一九二〇年頃の京城府の中国農家の野菜生産額は反当平均六〇円〜七〇円であった。^⑩一九一〇年頃の鎮南浦府の中国農家の野菜生産額は反当一五二円で非常に高かった。^⑪一九三〇年頃の富仁地域の中国農家二五〇戸の年間生産額は一八〜二二万円であり、戸当七二〇〜八四〇円であった。朝鮮総督府商工課の調査によれば、一九二五年での中国農家九八八戸の年間生産額は七五万五、

四七五円^⑭で、反当七六・五円であった。中国農家の野菜生産額は作付面積と同様に地域と時期によつてばらつきがあるが、大体反当七〇〜八〇円であつたとするのが妥当であらう。

だとすれば、中国農家は平均作付面積が一町歩と推定されるため、表一の農家の戸数に七百〜八百円をかければ、朝鮮内の中国農家の年間生産額が導き出される。一九一〇年に二六六一、八〇〇円〜二九万九、二〇〇円、一九一五年に四三万五〇〇円〜四九万二、〇〇〇円、一九二〇年に六七万六、二〇〇円〜七七万二、八〇〇円、一九二五年に一四三万一〇〇円〜一六三万四、四〇〇円、一九三〇年に二三三万一、七〇〇円〜二六六万四、八〇〇円、一九三五年に一八四万五、九〇〇円〜二一〇万九、六〇〇円になる。このような中国農家の野菜生産額が朝鮮の野菜生産額に占める比重は、一九一五年に一・四〜一・七%、一九二〇年に一・七〜二・〇%、一九二五年に三・七〜四・二%、一九三〇年に四・八〜五・五%、一九三五年に三・二〜三・七%を各々占めていたことになる。^⑮ 中国農家による野菜生産額が一九三〇年に朝鮮内の野菜生産額の四・八〜五・五%に達しているのは、高い水準である。さらに朝鮮の野菜生産額は市場で販売された金額ではなく生産総額であり、中国農家は朝鮮農家のように自家消費のための野菜栽培ではなく、専ら市場向けの商業用の野菜栽培であつたことを考慮すれば、市場化された野菜販売額に占める比重は生産総額での比重より一層高くなるだろう。野菜生産額の何割が市場化されたかは知るすべがないため推定のしようがないが、中国農家は主に大都市の郊外で野菜を栽培しており、大都市の野菜供給に占める中国農家の比重を示す資料が散見されるため、以下に参考にした。

中国農家は一九二四年に「京城市中の蔬菜は三割以内」^⑯、仁川府では同時期に「需要する蔬菜の七割」^⑰を供給していた。朝鮮総督府の調査によれば、平壤府では「府内の野菜需要の大部分」、鎮南浦府では「野菜の栽培も亦殆ど独占」、元山府では「需要野菜の約八割」、清津府では「府住民の野菜需要の約八割」が中国農家によつて供給されていた。^⑱

大都市以外の地方での主要都市においても、中国農家の野菜栽培は盛んに行われていた。一九二九年では咸鏡北道会寧郡の中国農家五七戸が「三、二〇〇余戸一万五、五六〇余人口の食料に供給される蔬菜は……全部」を供給していた。^⑲ 平安

北道宣川郡の中国農家一二戸は一九二七年邑内の一万五千名の住民に行商四〇名を通して野菜を独占供給していた。^②平安北道の江界郡では一九三〇年に中国農家一八戸による販売額が一一万八、七〇〇円に上り、同地の野菜供給を独占する地位にあった。^③全羅南道の光州郡の中国農家は一九二六年に五戸に過ぎなかったが一九三一年には五〇戸に増加して、市内野菜需要の全部が彼らに独占されていた。^④すなわち、中国農家は大都市及び地方の主要都市の野菜供給に高い比重を占めていたのである。

このような中国農家の野菜栽培及び生産について、朝鮮人及び在朝日本人はどのように受け止めていたか見てみよう。一九二〇～一九三一年に朝鮮語新聞の『朝鮮日報』・『東亜日報』・『毎日申報』、日本語新聞の『京城日報』に掲載された、中国農家の野菜栽培及び販売に関する記事を時期が早い順にその見出しを列挙すれば、「仁川野菜状況、地元産は大概中国人の手で」(一九二四年四月二〇日掲載)、「農業も中国人に」(一九二四・九・一九)、「野菜も中国人」(一九二四・九・二二)、「蔬菜耕作の中国人朝鮮内に一万名、朝鮮人は被逐状態」(一九二四・九・二二)、「中国人の蔬菜業、第一打撃は朝鮮人のみ」(一九二四・一一・一四)、「仁川の蔬菜は支那人の勢力が独占の地位を占める」(一九二四・一一・一五)、「富川郡内の中国人蔬菜業年間の生産額七万円、朝鮮人はすべて打撃」(一九二四・一一・二六)、「内鮮人の共同戦線 支那人の野菜屋に對抗」(一九三〇・三・七)、「中国人蔬菜収入凡そ一十万円、朝鮮人がこれだけ奪われ、江界一か郡にこんな数字」(一九三〇・一一・二三)、「鮮内蔬菜栽培を支那人に奪はる 朝鮮農会頻りに機関雑誌で痛論」(「中国人農民二千六百、五年前(より)三倍半」(一九三一・三・八)である。

上記の記事の見出しから分かるように、朝鮮人社会は中国農家による野菜生産に対して強い警戒感を抱いていたばかりか、中国農家に収入を奪われているという認識さえ散見される。『東亜日報』は一九二四年九月二二日付の「中国人の職業侵奪」と題した社説で、中国商人と労働者に続き中国農民の旺盛な野菜栽培活動を紹介した後、「いくら我らがうまく言い訳をしても責任を転嫁することは出来ないであろう。今日中国人が我らの職業を侵奪する武器は強力でもなく偶然で

もない。専ら信用と勤勉であり……我らの欠点を指摘して広く同胞の反省^④を促した。なお、朝鮮農会の機関紙『朝鮮農會報』一九三〇年八月号の巻頭言では、朝鮮農家が不景気に窮迫していることを尻目に中国農民が急速な人口増加と莫大な利益を得ていることを指摘して、「支那人蔬菜業者を駆逐すべし」と過激な表現を用いながら、朝鮮農民の奮闘を督励した。^⑤

一方、朝鮮総督府の囑託として一九二三年頃に朝鮮の部落調査を行った日本人の小田内は、至る所で農民、商人、労働者として活発な経済活動を行う中国人に対して、「経済的潮流として……朝鮮への侵入」と表現し、「朝鮮人に対しても内地人に対しても、侮るべからざる勢力である」と警戒感を隠さなかった。^⑥

要するに、中国農家は都市部の野菜供給において高いシェアを占めていて、それが朝鮮人及び日本人に中国農民に対する警戒感を抱かせていたのである。次章では、中国農家が朝鮮の野菜生産において「侮るべからざる勢力」になった原因を歴史的に追って見たい。

- ① 南朝鮮過度政府編纂『朝鮮統計年鑑一九四三年版』（南朝鮮過度政府、一九四八年）四二頁。
- ② 朝鮮総督府（一九三三年a）二四八―二四九頁。朝鮮における中国人所有の土地は田畑二六万二、〇九四坪、水田二万九、五六二坪、敷地八万三、〇七二坪であった。京城商業會議所「調査資料 在鮮外国人所有土地」『朝鮮経済雑誌』第六八号（京城商業會議所、一九二一年八月）二二―二四頁。
- ③ 朝鮮総督府（一九三三年a）二四八―二四九頁。
- ④ 「中国人の蔬菜業」『東亞日報』一九二四年一月一四日。
- ⑤ 京城府庁編『京城府史』（京城府庁、一九二〇年・復刻版、京仁文化社、一九九〇年）五一―七頁。
- ⑥ 鎮南浦新報社編『鎮南浦案内記』（鎮南浦新報社、一九一〇年）一〇八頁。
- ⑦ 一九三一年五月編、駐新義州領事館報告文「駐在地華僑之農工商各業及散在各地之僑民戸口」『南京国民政府外交部公報』第四卷第一号（復刻版、中国第二歴史檔案館、一九九〇年）五三頁。
- ⑧ 一九三五年三月九日編、駐元山副領事館報告文「元山僑務之概要」『南京国民政府外交部公報』第八卷第三号（同上資料）七三頁。
- ⑨ 小早川九郎編（再刊担当近藤鋭一）『朝鮮農業発達史 資料篇』（一九六〇年、友邦協会）一〇四頁。野菜作付面積は一九三〇年までは大根、白菜の作付面積のみが公表されたが、その他の野菜は一九三一年の統計から取り入れられた。一九三〇年の作付面積のうちその他の野菜作付面積は一九三一年と同じ四万七千町歩として計算した。
- ⑩ 山口豊正『朝鮮之研究』（巖松堂書店、一九二一年）一五六頁。

- ⑪ 京城府庁編 (一九二〇年) 七一五頁。
- ⑫ 鎮南浦新報社編 (一九一〇年) 一〇八頁。
- ⑬ 一九三二年四月五日収、駐仁川辦事処暫代主任張義信稟文「仁川公設市場之菜類販売權」「駐韓使館保存檔案」(台灣中央研究院近代史研究所藏・登錄番号〇三一四七・二八・〇一)。
- ⑭ 「中國人生産額年四千余万円」『東亞日報』一九二六年一月二三日。
- ⑮ 朝鮮の野菜生産額統計は、小早川九郎編(一九六〇年、一一四頁)の場合、一九三〇年までは白菜、大根などの三種の統計であること、一九二九〜一九三三年の物価下落を反映していないため、主要な野菜三種の生産額を一九三四〜一九三六年平均価格で換算した朴(二〇〇一年、七六頁)の実質価格の推計データを利用した。
- ⑯ 「中國人菜蔬売況」『朝鮮日報』一九二四年八月一〇日。
- ⑰ 小田内通敏「來住支那人」『朝鮮部落調査報告(第一冊)』(朝鮮總督府、一九二四年a)五〇頁。
- ⑱ 朝鮮總督府「朝鮮に於ける支那人」(朝鮮總督府、一九二四年)一六一・一七二・一九六・二〇三頁。
- ⑲ 「會寧中國農民菜蔬權独占」『朝鮮日報』一九二九年八月二三日。五七戸の生産額は約四万円であった。なお、一九三五年頃では中國農家四五戸による生産額は約七万円であった。「中國人に独占된會寧의蔬菜栽培」『朝鮮日報』一九三六年五月二六日。
- ⑳ 「宣川邑内에서中國物不買同盟」『朝鮮日報』一九二七年六月一六日。
- ㉑ 「中國人蔬菜收入勿驚十一万円조선사람이이만치뵈겨江界一郡에이런數字」『東亞日報』一九三〇年一月三日。
- ㉒ 「光州附近의中華農激增」『毎日申報』一九三一年九月一日。
- ㉓ 「仁川野菜狀況土産은大概中國人の손으로」『東亞日報』一九二四年四月二〇日。
- ㉔ 「農業도中國人に」『東亞日報』一九二四年九月一九日。
- ㉕ 「平성귀도中國人」『東亞日報』一九二四年九月二日。
- ㉖ 「蔬菜耕作의中國人朝鮮内에一万名朝鮮人은被逐狀態」『朝鮮日報』一九二四年九月二二日。
- ㉗ 「中國人の蔬菜業第一打撃은조선사람은」『東亞日報』一九二四年一月一四日。
- ㉘ 「仁川の蔬菜와支那人의勢力独占의地位를占하였다」『毎日申報』一九二四年一月一五日。
- ㉙ 「富川郡内の中國人蔬菜業년산의절반은조선인은모다타격」『朝鮮日報』一九二四年一月二六日。
- ㉚ 「內鮮人の共同戰線 支那人の野菜屋に對抗」『京城日報』一九三〇年三月七日。
- ㉛ 「中國人蔬菜收入勿驚十一万円조선사람이이만치뵈겨江界一郡에이런數字」『東亞日報』一九三〇年一月三日。
- ㉜ 「鮮内蔬菜栽培を支那人に奪はる 朝鮮農會頻りに機關雜誌で痛論」『京城日報』一九三〇年八月九日。
- ㉝ 「中國人農民二千六百、五年前三倍半」『朝鮮日報』一九三一年三月八日。
- ㉞ 「社説 中國人の職業侵奪」『東亞日報』一九二四年九月二二日。
- ㉟ 「卷頭言 支那人蔬菜業者を驅逐すべし」『朝鮮農會報』第四卷第八号(朝鮮農會、一九三〇年八月)。
- ㊱ 小田内通敏 (一九二四年) 三六頁。

第二章 中国農民の野菜栽培の生成過程及び朝鮮移住の背景

第一節 朝鮮開港期における中国農民の野菜栽培

中国農民による野菜栽培の生成過程を具体的に検討するため、京畿道を事例として取り上げたい。その理由は二つある。第一に、京畿道の中国農家は、朝鮮内の中国農家に占める割合が一九一〇年に五五%、一九一五年に二六%、一九二〇年に二三%、一九二五年に一七%、一九三〇年に一八%で、一九三五年に一〇・二%、一九四三年に四・二%であり、一九二〇年代初めまでは最も多かったが、次第に平安北道など朝鮮の北部地域に追い抜かれたものの、中国農家による野菜栽培が旺盛に行われた道としての地位を保っていたためである(表一参照)。

第二に、京畿道は朝鮮の野菜生産額では常に首位を保ち、朝鮮における野菜生産の中心地であったためである。例えば、一九三五年の野菜生産額は九八九万四、八〇四円で全道の一七・六%を占めて首位にあった^①。なお、京畿道は野菜大消費地の京城府と仁川府を抱えていて、野菜栽培には好条件の地理的位置にあった。上記の二つの理由により、京畿道は中国農家の野菜栽培について検討するのに、最も相応しい地域といえる。

京畿道への中国農民の移住が始まったのは一八八七年頃で非常に早かった。朝鮮総督府の調査資料は、中国農民の最初の移住の経緯を次の如く紹介している。

仁川開港以来内地人及支那人の増加するに従って、蔬菜類の需要尠からざるに着目し、明治二〇年頃山東人にして、戎克船の乗組員なるもの種子を芝罘より輸入し、富川郡多朱面の鮮人と共に蔬菜栽培に従事したのが支那人農業者来住の嚆矢である。当時農業に従事せし者は王及姜の二名であった^②。

すなわち、山東省出身の王と姜の姓を有する中国人二名が明治二〇年（一八八七年）頃に仁川港の開港に伴って日本人及び中国人の移住が増加し、野菜に対する需要が少なくないことに着目し、芝罘より持ってきた種子で野菜を栽培したのが始まりだということである。一八八七年という年は、京畿道だけでなく、近代朝鮮における中国農民の野菜栽培が始まった年でもある。これは日本農民の朝鮮移住が「大凡明治二十七、八年の日清戦争頃」^③とされるのに比べて七、八年早く移住したことになる。

なお、王氏と姜氏が仁川府に野菜栽培を始める前年の一八八六年には、仁川の日本居留地、清国居留地、各国居留地に居住する中国人は二〇五名、日本人は七〇六名であつて、この二名が野菜を常食する約千名の野菜需要に着目して野菜栽培を始めたことになる。仁川の居留地居住の外国人口は一八九三年に三、二一五名（中国人七二一名、日本人二、〇五四名）^④に増加して野菜に対する需要は一層増え、中国農家は一八九二年に二二名（約五戸）^⑤、日清戦争直前に一五戸に増加した。^⑥中国農民の移住初期に、どのような野菜栽培及び販売活動を展開していたかについては、仁川日本領事館が一八九四年八月に本国に行った報告に詳細に紹介されている。

三四年來清国山東省民ノ移住シ來ルモノ逐年増加シ、此輩盛ンニ菜類、茄子、黃瓜、葱、玉蜀黍等ヲ培植シ、其勤勉ト廉価ニ販売スルトハ到底本邦人ノ拮抗スル事アタハザルモノナリトテ、近年本邦人ハ専ラ沢庵、菜漬等ヲ製造スルヲ目的トナシ、菜蔬等ノ販売ハ清国人ニ委シテ顧ミザルモノアルニ至レリト云フ、又清国農夫ハ耕植ノ暇弊衣垢面各自竹籃ニ少許ノ野菜ヲ盛り、朝鮮人ト均シク我居留民ノ門戸ニ就キ買ハン事ヲ求メテ止マザルガ如キ、彼輩ガ營業ニ熱心ナル実ニ驚歎ニ堪ヘザル所ニシテ、此輩菜蔬ヲ販売シタル余剩ヲ蓄積シテ毎冬帰国ノ際少クモ三四十圓ノ金ヲ携フト云フ、而シテ本邦農民ハ四五五年間ノ久シキ本港ニアルモノト雖モ未タ曾テ十數金ダモ懷中セルコトヲ聞ザルナリ。^⑦

この報告により、中国農民は胡瓜（キュウリ）、茄子、葱、トウモロコシなどの野菜を勤勉に栽培し、日本居留民の家を

訪問して廉価に販売しており、日本農民が彼らに到底拮抗しえないほどその栽培と販売が優れていたことがうかがえる。仁川日本領事館の報告と同様に、朝鮮開港期の日本農民の野菜栽培及び販売と中国農民のそれと比較して、日本農民の覚醒を促す声が少なからず散見される。

日本農民は「蔬菜を自身作付するの勞を厭ひ往々朝鮮人の栽培せるものを買求め之を市場に持出し一の口錢取に甘ん^⑧」^⑧じる一方、朝鮮人及び中国農夫を雇用して野菜を栽培するため廉価な野菜を供給できなかつたと指摘する声もあつた。そのため、統監府農商工務部農林課は一九〇六年頃に仁川に移住しようとする本国の日本農民に対して、「予メ忍耐力ノ強キ勤勉ナル支那人ト競争スルコトヲ念頭ニ置カサルヘカラス^⑩」と戒めた。

一方、日本人及び中国人の増加に伴う野菜需要の増加に対して、朝鮮農民はいかに対応したかという問題も見逃せない。朝鮮農民は朝鮮開港期に「野菜栽培業を以て特殊な生産部門と一般に考へられる傾向が大であつた^⑪」こと、自家用の栽培が主をなしており、商業用の野菜栽培は京城、開城などの一部地域に限られていた。^⑫なお、「朝鮮蔬菜は其種多からず白菜、大根、水芹等の外、内地人の口に適するもの割合に少なく、特に記すべきもの無^⑬」いとされ、朝鮮農民は日本人が好む葱、玉葱、茄子、ジャガイモ、サツマイモなどの野菜の需要を充たせていなかった。^⑭

その結果、朝鮮開港期に日本人の人口が急増するに伴い、朝鮮内の生産では在朝日本人の野菜需要を充たせず、日本、中国などより大量の野菜を輸入していた。一九〇八―一九一〇年の三か年平均で玉葱の輸入額は一万七、〇六六円（うち一万六、三三〇円は日本からの輸入額）、サツマイモ二万二三三円（同一万七、八六八円）、ジャガイモ九、六三九円（同七、一四五円）、三つの野菜以外の他の野菜二二万二、九六一円（同一二万三、〇一九円）、合計一六万九、八八八円（同一二万三、〇一九円）^⑮に上り、野菜輸入額のうち九一％は日本からの輸入であった。

つまり、中国農民は在朝日本人の求める野菜の供給不足をとらえて、日本人の好む新鮮な野菜を廉価に販売したことが、朝鮮開港期の中国農民による野菜栽培の成功の背景にあつたと考えられる。中国農民の野菜栽培に対して、朝鮮語新聞の

『独立新聞』は「野菜栽培をするにも……大韓の人より賢く真面目でありしつかりとしている」^⑮と論じており、中国農民を警戒する声が朝鮮開港期にすでに挙がっていた。

一方、仁川における中国農民の存在を浮き彫りにしたのは日清戦争であった。戦争に直面した中国農民は「馬鈴薯大根其他皆ナ其種苗ノ至小ナルモノ迄掘尽シ之ヲ売却シテ帰國ノ途ニ就」^⑰き、その結果「野菜ニ至ル迄何レモ二倍内外ノ騰貴ヲ現ハシ……秋後ニ至ラバ一層ノ欠乏」^⑱の状況をもたらした。

しかし、一八九五年四月に日清講和条約が締結された後には、再び仁川に戻って来た中国農民に加えて、新しく移住した農民も増え、一九〇六年での中国農家は一五六戸（五四〇名）に達し、商業戸数九二戸（五四九名）を上回り、開港期の仁川において中国農民は中国人経済活動の主要な一角を形成するにいたった。

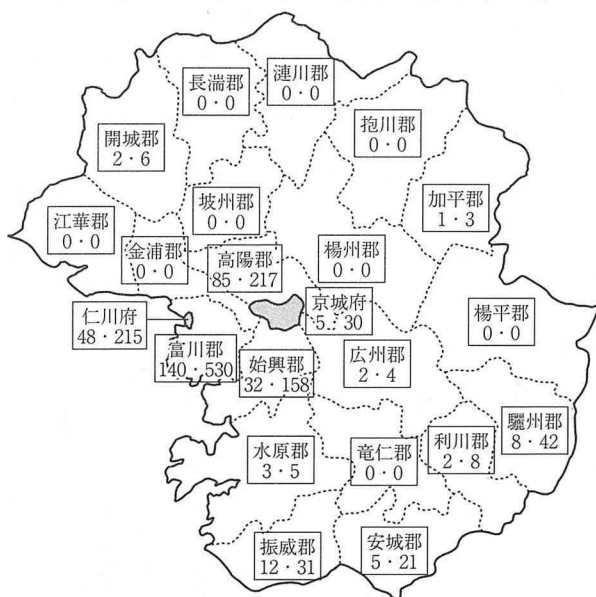
仁川より始まった中国農民の野菜栽培は隣の漢城付近にも広がった。龍山で野菜栽培を行っていた中国農耕業主の劉義泰が一八九九年一月一九日夜に彼の住宅に侵入した一〇名余に銀洋二五元を盗まれたという記事があることから、漢城付近でも一八九九年以前よりすでに中国農民による野菜栽培が行われていたことがうかがえる。中国農民の耕作地は龍山より漢城付近の東大門外の延禧面、西大門外の孔德里などに広がり、胡瓜、ホウレン草、チシャ菜、大根などを栽培していた。^⑲一九〇八年での漢城府の中国農民は一三戸・五〇名であり、一九一〇年頃には中国農民は同地の野菜需要の五%を供給し、日本農民の3%をやや上回っていた。^⑳

中国農民の野菜栽培は仁川、京城から次第に各地の開港場の外国人居留地の周辺に広がり、とりわけ平壤、^㉑鎮南浦、^㉒群山で中国農民の野菜栽培が盛んに行われた。

第二節 中国農民と山東省との関係

一九二七年一二月末現在の京畿道における中国農家三四五戸の地域的分布を示せば、富川郡一四〇戸、高陽郡八五戸、

図1 京畿道における中国農家の各府・郡別分布（1927年）



出典：京畿道庁編『農事統計 昭和二年度』（京畿道庁，1929年）
13～14頁より作成。

注：図の中の数字は、左側は中国農家の戸数，右側は中国農民の人数である。

仁川府四八戸、始興郡三二戸、振威郡一二戸、驪州郡八戸、京城府五戸、安城郡五戸、水原郡三戸、広州郡・開城郡・利川郡各二戸、可平郡一戸であった（図一参照）。京畿道の中国農家の分布は野菜の消費地である京城府と仁川府を軸に形成され、京城府及びその周辺の高陽郡、始興郡の一二二戸、仁川府及びその周辺の富川郡に一八八戸が位置し、前者の「京城圏」と後者の「仁川圏」に京畿道の中国農家の約九割が集中していた。

「仁川圏」である富川郡に京畿道の中国農家の四割が集中していることに注目しよう。同郡への中国農家の移住が始まったのは一九〇七年頃であった^{②⑦}。仁川府内で野菜栽培を行ってきた中国農家の耕作地が市街地になったことにより、隣の富川郡に移住したのがきっかけであったとされる。同郡における中国農家の戸数及び人口は一九二四年七月に九八戸・三三四名であったのが、一九二七年一二月末には一四〇戸・五三〇名、一九三〇年一〇月には一、一八九名（男性九四六・女性二四三・約三四〇戸）に急増した。富川郡の中でも仁川府と隣接する多朱面に中国農民が集中していた。一九三〇年一〇月現在の多朱面の民族別人口構成を見れば、朝鮮人八、〇五七名（全体の八五・三％）、日本人三五二名（三・七％）に対して、中国人は一、〇三五名（二・一％）で、面民の一割が

農民を主とする中国人であった。

中国農耕業主で構成された「仁川中華農業会」の会員二二八名（一九三〇年）の居住地別分布を見れば、会員の七七％に該当する一七六名の中国農耕業主が多朱面で野菜栽培を行っていた。^②その居住地を里單位に分けて見れば、龍亭里六〇名（全体の二六・三％）、長意里三一八名（一六・七％）、道禾里三三名（一四・五％）、士忠里三三名（一〇・一％）、鶴翼里九名（三・九％）、新花水里八名（三・五％）、金谷里五名（二・二％）の順で、同面の中でも龍亭里、長意里、道禾里、士忠里に集中していたことがわかる。

同会の会員二二八名の出身省はすべて山東省であった。その出身地を県別に分類すれば、榮成県六三名（全体の二七・六％）、牟平県六〇名（二六・三％）、諸成県三八名（一六・七％）、文登県二七名（一二・八％）、萊陽県九名（三・九％）、日照県八名（三・五％）、肥城縣七名（三・一％）、即墨縣七名（三・一％）、寿光縣と棲霞縣それぞれ二名、黃縣一名、福山縣一名、縣不明二名であった。^③富仁地域の中国農耕業主の出身地は山東省の中でも仁川に近い東沿岸地区の榮成縣、牟平縣、文登縣、萊陽縣が多数を占め、青島の隣である諸成縣、日照縣、肥城縣がその次であり、山東半島の中央及び北部地域はほとんどなかった。一九三〇年頃の忠清南道大田の中国農民約二百名の出身地も文登縣、黃縣、牟平縣、萊陽縣であり、^④富仁地域とあまり変わりなく、朝鮮へ移住した中国農民は山東省の東沿岸地区出身者が多かったと判断しうる。仁川府及び富川郡の中国農耕業主の年齢は、一〇代一名（全体の〇・五％）、二〇代三七名（一六・二％）、三〇代一〇五名（四六・一％）、四〇代五八名（二五・四％）、五〇代二二名（九・六％）、六〇代五名（二・二％）であり、働き盛りの二〇～四〇代が中心で五〇代も少なくなかった。

次に富仁地域の中国農耕業主の履歴についてみよう。同会会員のうち移住前の履歴が把握できるのは同会の幹部一〇名である。張忠（六五歳）は一八九八年頃に朝鮮に移住して多朱面龍亭里で野菜栽培を行っていた。彼は諸成縣黒石庄出身で幼い時から家庭の農事に携わり、三〇代初め頃に朝鮮に移住した。張毓山（三八歳）、姜級（三七歳）、劉孝全（三八歳）、

姜所学（三〇歳）、王文緒（五〇歳）、孫世鴻（三一歳）は皆張忠と同様に幼い時から家庭の農業に従事して、朝鮮に移住した農民であった。仁川府松坂町居住の姜煥成（三二歳）のように一九一六年に在芝罘中国商店の仁大号で四年間商業に従事した後、一九二〇年に仁川に移住して野菜栽培を行っていた経歴の農民もいたが、大概は出身地で農業に従事していたと考えられる。幹部一〇名の移住時期は、一八九〇年代に一名、一九一〇年代に三名、一九二〇年代に六名であり、学歴は無学五名、私塾で二〜三年間学んだ者が五名であった。^⑤

一方、同会の会員が同地に移住して野菜栽培を行った要因に関しては、会員登録に記されていないため、別の資料を利用して検討してみよう。山東大学華僑華人研究所長の晁氏が一九八〇年代に韓国より故郷の日照県に帰国した三九名（男性二九名・女性一〇名）の帰国華僑について聞き取り調査を行った結果によれば、同県生まれの二七名が朝鮮に移住した理由は、「生計を立てるため」が一七名（全体の六三％）、「移住先の親類と友達を頼りに」が七名（二六％）、「家庭不和」が二名（七％）、「逮捕を逃れて」が一名（四％）であった。^⑦ 移住前の職業は、貧農一九名（全体の七〇％）、農夫三名（一一％）、中農一名、木匠一名、写真師一名、理髪師一名、小商人一名であり、^⑧ 貧農出身がほとんどであった。すなわち、故郷の経済的な理由が朝鮮移住のプッシュ要因であったことが分かる。

ところで、富仁地域の中国農耕業主のうち日照県出身は全体の三・五％に過ぎず、ほとんどが東沿岸地区出身であったことに注目する必要がある。荒武氏^⑨と山内氏^⑩は同地区が一九一〇、一九二〇年代に経済的発展や好況が続ぎ、山東省の他の地区より相対的に豊かになっており、同地区出身の満洲移住は必ずしも経済的な要因によってなされたものではなかったと主張する。すなわち両氏は従来の研究で山東省人の満洲移住の背景として零細な土地経営、自家経営地のみでは生活できない経済的要因が強調されていた点を見直そうとしたのである。両氏の指摘はこの地区の中国農民の朝鮮移住にも当てはまることであり、日照県のように経済的貧困が朝鮮移住の主要な要因ではなかったことを示唆する。

それに関連して、群山在住の呂建芳氏（一九四六年生まれ）の証言^⑪は同地区の中国農民の朝鮮移住の要因把握の手がかり

になるため、以下に証言の概要を述べておく。

彼の父親（一九〇九年生まれ）と伯父（一八九九年生まれ）は萊陽県出身であった。伯父が一九二〇年に群山に来て同郷出身の劉氏農家の農夫として働いた。伯父は賃金を貯めて野菜栽培をする農耕業主になり、一九二六年に彼の父親を故郷から連れて来た。彼は「中国で貧しいから移住したのではなく……その当時韓国に来て農事をやれば相当のお金を稼いだ」という話を聞いたという。なお「その当時は韓国に來ると金稼ぎが良くて朝鮮に来ていたチヨンガー達、中国では最高の婿がねでした」とも話した。彼の伯父の故郷から一キロ離れたところに劉氏の故郷があった。劉氏はもともと忠清北道の永同で布木店（呉服屋）を經營していたが「年末に計算をしてみると布木店を經營して稼ぐ収入より農事で稼ぐ収入が良かった。それでその方が（良いということ）布木店をやめて（群山に）行つて農事をやつた」と話した。彼の父親は二三歳の時に故郷に帰つて結婚をし、一九四一年に伯父から獨立して一九六四年に死亡する直前まで農耕業主として野菜栽培を行ったという。

まず、呂氏が「中国での生活が貧しいから移住したのではなく……その当時には韓国に来て農事をやれば相当のお金を稼いだ」という証言に注目する必要がある。つまり山東省でのプッシュ要因よりも朝鮮で野菜栽培をすれば高い収益を得られるという見込み、朝鮮でのプル要因がより強かつたことを示唆する。朝鮮での野菜栽培が高い収益を見込めたことは他の史料でも裏付けられる。日本人農事試験場技師の恩田は「韓国併合」直前に朝鮮主要都市での野菜及び果樹栽培の状況を調べた結果、野菜の需要より供給が少ないことと交通不便による運搬費を要するために、日本よりも「韓国ニ於ケル蔬菜ハ品質如何ヲ問ハス一体二価格實シ」と日本人の朝鮮での野菜栽培を勧めた。これは中国農民にも当てはまる話であり、山東省人にとって朝鮮は野菜栽培で高い収益を得る「好機の地」であつたのである。

一方、呂氏の伯父と父親の朝鮮移住と野菜栽培の経緯を見れば、同郷の劉氏が先に朝鮮に移住して野菜栽培を行い成功すると、同郷より彼の伯父を農夫として呼び寄せ、伯父は賃金を貯めて野菜栽培の農耕業主になり、今度は同郷から彼の

父親を農夫として呼び寄せた。前述の如く、日照県出身の朝鮮移住の原因の二六％が先に移住した親類や友人を頼った移住であり、山東省人の朝鮮移住には連鎖移住（chain migration）が確認出来る。

もう一つの移住の背景としては、朝鮮と山東省における農夫の間に賃金の格差が存在していたことも看過してはならない。日照県に近い青島付近の農夫一日の賃金は一九二〇年代初めでは二五銭で、^{④③}朝鮮内中国人の一日平均賃金は一九二二年七月では鉱工業一・二三円、土木建築業一・五九円、農業七〇銭であった。^{④④}農夫だけを比較すると朝鮮の方が二・八倍割高であって、農夫として朝鮮移住する十分なインセンティブがあったのである。

ところで、農夫として朝鮮に移住して農耕業主になるケースが多かったが、最初から農耕業主として移住する中国農民もあった。その場合、富仁地域の農耕業主として野菜栽培を行うためには初期費用として小作料が坪当〇・〇六〇・一円と種子代が必要であった。^{④⑤}仮に一町歩を耕作するとすれば、小作料は一八〇・三百円となり、小作料は前約として半額が必要となるため、小作料は九〇・一五〇円が要り、種子代と農具などを購入する費用まで入れると、少なくとも二百・三百円の資金が必要であったと考えられる。富仁地域の中国農耕業主はこの初期費用を「郷土から持って来た金を種子代とし、肥料は無代か廉価で弁ずるやうにし、中には自分の耕地を借りる時の保証人又は地主たる支那人から一時融通するものもあり、又支那人の食料雜貨商から生産品と代償する約束で融通」^{④⑥}して調達していた。

以上のように、朝鮮移住の中国農民がほとんど山東省出身であることは野菜栽培において少なからぬ意味を有する。恩田は彼らが「故国ニ在リテ蔬菜栽培ニ経験アルモノナル故ニ其栽培ノ術ヤ頗ル熟練」^{④⑦}なると指摘した。山東省は緯度上、地質上、気候上野菜生産の好適地として古い歴史を有する地域で、近代期には葱、韭、菠菜、蒜、辣椒、蓮根、芹菜、芋などの生産額が中国の省のなかですべて一位であった。^{④⑧}山東省産の野菜は芝罘を通して満洲に大量に移出され、^{④⑨}朝鮮にも少なくない野菜が輸出されていた。

山東省の野菜名産地は黄河下流の沿岸地帯を以て省内第一の名産地と称せられ、また河川の流域及び半島内に発する諸

川の流域においても多数の名産地があった。黄県、文登県、牟平県は野菜の名産地として知られていたが、前述の如く富仁地域の中国農民はこれらの地域の出身者が多かった。なお、近代に極東ロシアの都市に野菜を独占的に供給していたのも都市近郊で野菜を栽培していた中国農民であり、彼らはほとんど山東省出身者であった。⁵¹⁾

要するに、中国農民が山東省出身であることが、中国農民の野菜栽培が盛んであったことと関連していると考えられるが、それに関しては次章で検討したい。

- ① 朝鮮総督府『昭和拾年 農業統計表』（朝鮮総督府、一九三七年）一―二頁。
- ② 朝鮮総督府（一九二四年a）一〇九頁。二名が野菜を栽培していた地域は仁川府内牛角里一帯であった。「仁川과 中国人勢力」『東亜日報』一九二四年四月一七日。「中国人의 蔬菜業」『東亜日報』一九二四年一月一四日。「野菜消費五万斤仁川서 만十七万円」『東亜日報』一九二四年四月二〇日。
- ③ 小早川九郎編（一九四四年）五八六―五八七頁。
- ④ 仁川日本人商業会議所『明治四拾年仁川日本人商業会議所報告』（仁川日本人商業会議所、一九〇八年）七―七二頁。
- ⑤ 仁川府庁編纂『仁川府史』（仁川府庁、一九三三年）一、五二六頁。農民以外は、職工三七一名、商人百名、官吏二七名であった。
- ⑥ 朝鮮総督府（一九二四年a）一〇九頁。「野菜消費五万斤仁川서 만十七万円」『東亜日報』一九二四年四月二〇日。
- ⑦ 金敬泰編『通商彙纂 韓国篇二』（復刻版、驪江出版社、一九八七年）六四四―六四五頁。
- ⑧ 山口豊正（一九二一年）一五六―一五七頁。
- ⑨ 鎮南浦新報社編（一九二〇年）一〇九頁。
- ⑩ 統監府農商工務部農林課『韓国ニ於ケル農業ノ経営』（統監府、一九〇七年）六八頁。
- ⑪ 小早川九郎編（一九四四年）一二頁。
- ⑫ 小早川九郎編（一九四四年）三四七頁。
- ⑬ 山口豊正（一九二一年）一五五頁。
- ⑭ 統監府農商工務部農林課（一九〇七年）六八頁。
- ⑮ 「調査資料 朝鮮輸移出入農産品価格三年対照」『朝鮮農会報』第六卷第七号（朝鮮農会、一九一一年七月）六―七頁。
- ⑯ 「위급한일」『獨立新聞』一八九八年七月一八日。
- ⑰ 一八九四年六月二〇日発、在仁川二等領事能勢辰五郎ヨリ在京城特命全權公使大島圭介宛「全羅民援報告宮内驛援ノ件」『駐韓日本公使館記録二』（復刻版、国史編纂委員会編、一九八八年）。
- ⑱ 金敬泰編（一九八七年）六五〇頁。しかし、中国農民全員が帰国したのではなかった。「仁川在留の支那人はいまや十四―十五名に過ぎずこれなどは極貧者にして農業に従事し若しくは他人の使役に属するものあり、我居留民はかえって彼などを憐れみ彼などが持ち来る農産物は価格よく買い取り与える」。「仁川在留の支那人」『大阪毎日新聞』一八九四年九月三日。
- ⑲ 一九〇六年春季、仁川中華会館呈文「華商人数清冊……各口華商清冊」『駐韓使館保存檔案』（同〇二・三、五、〇四―一〇三）。日本人の統

- 計によれば、一九〇八年四月末の中国農家は九二戸（一八三名）に
 っているが、それには府内しか含まれていない可能性がある。仁川開
 港二十五年記念会『仁川開港二十五年記念史』（仁川開港二十五年紀
 念会、一九〇八年）四三頁。
- 20 高麗大学校亜世亜問題研究所韓国近代史料編纂室編『旧韓国外交関
 係付属文書第六卷外衙門日記』（高麗大学校出版部、一九七四年）六
 四〇～六四二頁。
- 21 京城府庁編（一九二〇年）五一六～五一七頁。
- 22 一記者「朝鮮問答」『朝鮮』第三号（朝鮮雜誌社、一九〇九年一
 二月）九八頁。
- 23 山口豊正（一九二一年）一五六頁。
- 24 平壤の中国農家は一九〇九年頃に主に白菜を栽培して良好な成果を
 上げていたが、大根、葱、ジャガイモの作付面積は広くなかった。恩
 田鉄彌「平壤に於ける果樹及蔬菜栽培法」『朝鮮』第三卷第六号（同、
 一九〇九年八月）七五～七六頁。
- 25 鎮南浦の中国農家は一九〇八年頃に六〇戸・一九一名に上った。富
 田儀作「鎮南浦附近の農業経営一斑」『韓国中央農會報』第二卷第七
 号（韓国中央農會、一九〇八年七月）一七頁。
- 26 山口豊正（一九二一年）一五六頁。
- 27 「富川郡内の中国人蔬菜業」『朝鮮日報』一九二四年一月二六日。
 「中国人の蔬菜業者」『東亞日報』一九二四年一月一七日。
- 28 「富川郡内の中国人蔬菜業」『朝鮮日報』一九二四年一月二六日。
 「農業と中国人」『東亞日報』一九二四年九月一九日。
- 29 朝鮮総督府『昭和五年朝鮮國勢調査報告道編 第一卷京畿道』（朝
 鮮総督府、一九三三年b）六一～六三頁。ただ、この人数は同郡の中
 國人全体の人口であるが、中国農民の戸数が全戸数の約八割を占めて
 いた。一特派員「인흥초지富川郡」『開壁』第四八号（一九二四年六
 月）一二五頁。
- 30 朝鮮総督府（一九三三年b）六一～六三頁。
- 31 富仁地域には一九二二年に中国農家で構成された「仁川農業公議
 会」が設立された。この組織に内紛が発生して、一九三〇年に「仁川
 中華農會」と「中華農産組合」の二つの団体に分離された。詳細は、
 拙稿「近代朝鮮華僑の社会組織に関する研究」『京都創成大学紀要』
 第一〇巻第一号（京都創成大学成美学会、二〇一〇年三月）九九～
 一〇〇頁を参照。
- 32 一九三〇年、中華勞工協會仁川支部呈文「中華農會會員冊」『駐韓
 使館保存檔案』（同〇三一四七・一九一〇二）。富川郡以外は仁川府
 の万石町一五名、松坂町七名、花町六名、新町四名、野菜市場四名、
 花房町二名、栗木里二名、内里一名、富平一名、山根町一名であった。
- 33 一九三〇年、中華勞工協會仁川支部呈文「中華農會會員冊」（以上
 檔案）。
- 34 一九三〇年六月、駐仁川領事館報告文「管内各巨埠華僑狀況」『南
 京国民政府外交部公報』第三卷第三号（同上資料）一四九～一五〇頁。
- 35 一九三〇年、中華勞工協會仁川支部呈文「中華農會會員冊」（同上
 檔案）。
- 36 一九三〇年、中華勞工協會仁川支部呈文「中華農會會員冊」（同上
 檔案）。
- 37 Chao Zhongchen, 'Report of Fieldwork On the Returned Overseas
 Chinese of South Korea in Rizhao City, Shandong Province',
 Elizabeth Sinn ed. *The Last Half Century of Chinese Overseas*,
 (Hongkong: Hongkong University Press, 1998), p.468.
- 38 Ibid., p.466.
- 39 荒武達朗「近代満洲の開発と移民」（汲古書院、二〇〇八年）。
- 40 山内雅生「民国初期の山東省からの東北移民」本庄比佐子編『日本

の青島占領と山東の社会経済 一九一四—一九二二年」(東洋文庫、二〇〇六年)。

④1 구선회의 『韓國華僑의生活과正体性』(国史編纂委員会、二〇〇七年) 三一八—三四頁。

④2 恩田鉄彌 『韓国ニ於ケル果樹蔬菜栽培調査』(農事試験場、一九〇九年?) 四五—五〇頁。一九一〇年代初め頃に京城に日本人が朝鮮人の野菜畑を次々と住宅地として購入して野菜畑の面積が減少したことが京城における野菜供給不足の一つの要因であったという。朝鮮研究会編『最近京城案内記』(朝鮮研究会、一九一五年) 七七—七八頁。

④3 篠原英太郎 『山東省の農業観』『朝鮮農會報』第一七卷第二二号(朝鮮農會、一九二二年二月) 三頁。

④4 朝鮮總督府内務局社会課『会社及工場に於ける労働者の調査』(朝鮮總督府、一九二三年) 一七頁。

④5 小田内通敏 (一九二四年) 四九頁。

④6 小田内通敏『朝鮮における支那人の経済的勢力』(東洋講座第七輯)

第三章 野菜栽培の特徴と販売

第一節 野菜栽培の特徴

中国農民による野菜栽培がいかなされたかを具体的に検討するため、前述の富川郡を事例に取り上げてみたい。

朝鮮總督府囑託の小田内が一九二三年頃に富川郡の中国人野菜栽培について調査した結果が表二である。調査地は文鶴面、南洞面、多朱面の三か面で、調査戸数は一八八戸、耕地総面積は一四八町歩(四万四千坪)、戸当平均耕地面積は〇・七九町歩(二、三七〇坪)であった。各面の戸当耕地面積は多朱面が〇・五五町歩(一、六五〇坪)、文鶴面が〇・八七町歩

(東洋研究会出版、一九二五年) 三四頁。中国農民の中には小作地の朝鮮及び日本地主から初期費用を借りる者もあった。「中国人野菜経営者」平壤近郊에 二百戸」『毎日申報』一九三一年七月二〇日。

④7 恩田鉄彌 (一九〇九?) 四七頁。

④8 華北事情案内所編『山東省事情』(北支事情解説パンフレット(第三輯)(華北事情案内所、一九三九年) 三〇—三一頁。

④9 興中公司大連事務所『芝罘状況及大連中央卸市場概況』(興中公司大連事務所、一九三八年) 一二頁。

⑤0 南滿洲鉄道株式会社天津事務所調査課『山東河北兩省に於ける蔬菜事情』(北支經濟資料第三十六輯)(南滿洲鉄道株式会社天津事務所、一九三七年) 一三—一六頁。

⑤1 イゴリ・R・サウエリエフ『移民と國家——極東ロシアにおける中国人、朝鮮人、日本人移民』(御茶ノ水書房、二〇〇五年) 二一八—二一九頁。

表2 富川郡における中国農家の野菜栽培状況（1923年頃）

	調査戸数(戸)	全耕地面積(町歩)	1戸当平均面積(町歩)	家族一人当面積(町歩)
文鶴面	100	87	0.87	0.22
南洞面	5	15	3.0	0.37
多朱面	83	46	0.55	0.11
合 計	188	148	0.79	—

出典：小田内通敏（1924年）46頁。

注：南洞面の1戸当平均面積は原資料には3.1と記載されているが3.0の誤記と見られる。

（二、六一〇坪）、南洞面が三町歩（九千坪）であり、南洞面が最も広く多朱面、文鶴面の順であった。同じ郡内でも平均面積が異なるのは、土地の小作料（借地料）と関係があると考えられる。一九二四年に多朱面の四つの里と文鶴面の二つの里に居住する中国農家九八戸の野菜栽培耕地面積は二八万二、五九二坪で、その小作料は一万一、九三二円であり、坪当平均小作料は約四銭であった。南洞面の小作料は不明であるが、仁川府と隣接している多朱面と文鶴面に比べると仁川府から遠いため、二つの面より相対的に小作料が低かったと推測される。同面の五戸の平均面積が三町歩と非常に広かったのはこのような原因が働いていたであろう。なお、上述の九八戸の中国農家は三二四名の農夫を雇い、この地域における中国農家は平均して農耕業主一名を含めて四・三名が野菜栽培に従事していた。

富川郡における中国農家の野菜栽培の特徴については、西水が一九三〇年代半ばに多朱面龍亭里の中国農家の野菜畑を見学して書いた論文によくまとめられているため、それを中心に検討しよう。

第一の特徴は、「彼等は実に勤勉、労を惜まずに畑の世話をする点、そして耕地が極めて整然と整へられている点」^③である。彼は豪雨の後の晴れた朝に同地を訪れた時に、朝鮮農民が畑で働いているのはほとんど見られないのに対して中国農民はもうあちこちで働いている姿を見て驚いたと述べた。小田内も中国農民の勤勉さについて、「耕地に対する彼等の労働の精根は、到底内鮮人の想像すら及ばない所で、家族の全員はまさに日出と共に起床し日没に至るまで野外作業に従事する」^④と驚嘆した。農事技師の恩田も中国農民の勤勉さを「専心業務二熱中シ常ニ時期ヲ誤ラサル」^⑤と称えた。

第二の特徴は、堆肥等の有機肥料を豊富に使用する点である。野菜栽培は労働力と肥料との結合によって行われ、質の高い葉を大量に得ることが、良質の野菜を生産する鍵となる。なお、一九三二年頃に平壤で二、八〇〇坪の白菜を栽培する朝鮮農家の費用構成を見れば、無機肥料を主とする肥料代が費用総額の七〇・八％、小作料が二・四％、人夫の賃金が一一・七％^⑥各々を占めていた。即ち、野菜栽培は肥料代をいかに節約するかが低価格での生産に欠かせなかつたのである。西水は「山東人農業者は毎日オンドルの灰を付近の家から集め、一方では人糞尿を汲み取つてきてこれらを混合して堆肥の製造に余念がない。そしてかうして得た堆肥を春の融氷をまつて畑にいれ^⑦ていたという。中国農耕業主は野菜畑付近に大きな肥溜を設けるのが普通であり、耕地のそばに家屋を設けてその一角に養豚をしてできた豚糞を肥料として使つた^⑧。中国農耕業主は不足する肥料については、官庁などの糞尿を割安な値段で購入した。富仁地域では中国農家の野菜組合の仁川農業公議会が仁川府庁など官庁の糞尿を請け負つて、各組合員の中国農家に糞尿を割り当てる一方、各農家は独自に「仁川付近に於いては府内の人糞尿処分を有償または無償で引き受け、またその農作物を戸毎に販売して歩くときに寄付してもらふ約束をするのが多^⑨」かつたという。

第三の特徴は、集約的な野菜栽培を行つていた点である。西水は「支那人の畑には胡瓜、茄子、葱、キャベツ、漬菜、トマト、南瓜、冬瓜、西瓜等の蔬菜類が非常に多い。間作や混作は内地の畑よりも極端^⑩」であると述べた。小田内も「其の耕地を区分して各種の配列をなし、春蔬菜から夏蔬菜、それから秋冬蔬菜へと輪作をなしてゆく。此の輪作を行ふ為に一枚の畑を年中何回となく使用するから結局広い面積を耕作すると等しい結果にな^⑪」ると高く評価した。恩田は「耕地ノ利用ニ巧ミナルコト^⑫」と表現した。朝鮮語新聞の『東亜日報』は、「日本人は比較的広大な面積に馬鈴薯を栽培し、朝鮮人は従来通り大根、白菜のほかにくつかの野菜を栽培するだけ。中国人は集約的に狭い面積を利用して様々な野菜を栽培する^⑬」と称えた。

西水が以上のように取り上げた中国農家の野菜栽培の三つの特徴に加えて、中国農民の野菜栽培技術と、優良な中国産

種子の使用も考慮すべきと考えられる。

まず、中国農民の技術的な面である。中国農民は気候上乾燥の度合いが朝鮮より一層激しい山東省より来ているため朝鮮の気候に適応しやすかった。例えば、山東省の中国農民は必ず野菜畑の一隅に水源を構え、いつでも灌漑が出来るように設備を整えていた。^⑮なお中国農民は時に温室をつくり冬季にも野菜を栽培していた。^⑰中国農民の温室はビニールハウスではなく障子紙（在来の朝鮮紙）に、釜に入れて沸かした荏の油をブラシで振り撒いて乾かしたペーパーハウスであった^⑱が、朝鮮農民にはこのような野菜の温床栽培が普及していない時期であり、当時としては革新的な技術であった。恩田はこのような中国農民に対して「蔬菜栽培ノ技術ニ巧妙ナルコト」と賞賛した。仁川農業公議会の会員の于本海は、「以僑農蒔種之技甚精、遠非日鮮人所能」^⑲（僑農の栽培技術は極めて優れていて、日本人と朝鮮人が遠く及ばない能力である）とその巧妙なる技術を自認していた。

次は、中国農家が播種していた優良な中国産野菜種子である。山東省は近代に豊富な野菜品種及び種子を保有し、現在も野菜品種資源が一万余種に達する世界三大野菜生産基地の一つである。^⑳平壤公立農業学校教諭の斎藤は一九三〇年代半ばに平壤付近で栽培されていた中国産野菜品種を調査した結果、「当地方では支那産蔬菜の品種が或は支那原産種子が、内地在来種乃至内地産種子に比して広く適品種として栽培されつゝある事実を発見した。当地方に於ける蔬菜栽培者は支那人が非常に多い關係上支那産の蔬菜が非常に多い。殊に或品種にありては日本種を凌駕する経済的の品種となり、専ら支那種系統の蔬菜が独占して居る感がある」と述べた。京城の朝鮮週報社は一九三二年五月に社内農事改良部を設けて各種優良種子を実売配給する計画を立て、京城総領事館に中国の優良白菜種子と大根種子の紹介を依頼し、同総領事館は白菜種子として山東省平度県産出の「包頭蓮」、黄県産出の「黄県敦」、牟平県産出の「州菜」、大根種子として山東省平度県産出の「敲頭青」などすべて山東省産種子を紹介した。^㉑

なお、京城府中央卸売市場に一九三九年度に入荷された野菜の月別入荷量の番付をすれば、中国産種子で栽培された白

菜と朝鮮産種子で栽培された白菜の入荷量の順番は、四月は各々一七番目・三六番目、五月は二二番目・四四番目、六月は七八番目・五二番目、十一月は四番目・五番目、十二月は三番目・四番目、一月は二番目・一四番目、二月は二番目・一八番目、三月は九番目、三一番目であつた。²³即ち、冬季と春季白菜の場合、中国産種子で栽培された白菜が朝鮮産種子で栽培された白菜の出荷量を大きく上回つていた。

朝鮮で主に栽培されていた白菜の種子としては開城白菜種、中国直隸種、中国芝罘種があつた。²⁴開城白菜種は朝鮮伝統の種子として朝鮮農民が朝鮮内に亘つて栽培していた種子で、恩田は「其品質ノ良好ナル我國ニ於テ栽培スル菜類ノ上ニアリ」²⁵と称賛したほか、他の日本人も「其品質優良に有名なる支那白菜も或は一步を譲るの感あり」²⁶と高く評価していた。しかし、水原農林学校が一九〇八年に清国より白菜の種子を取り寄せて栽培した結果、「結球宜く同時に栽培せし開城白菜の結球に比して其質緻密堅固に出来て両者の間大に軒輊あるを見たり」と、朝鮮を代表する開城白菜より優れていたと報告している。²⁷なお直隸白菜種は朝鮮の氣候土質に適して栽培が容易であること、一株の重量が重く收穫量が多いこと、品質優良でキムチ漬けに適しており、平壤の朝鮮農家はキムチ用の白菜として一九一〇年代半ばより開城白菜の代わりに直隸白菜を栽培し始め、一九二〇年代半ばには開城白菜種を完全に駆逐した²⁸という。

朝鮮で栽培されていた中国産種子は白菜以外にも多かった。大根の種子としては「支那赤長二十日蘿蔔」(別名は支那姫蘿蔔)、「支那青肌蘿蔔」(別名は支那青蘿蔔)、ホウレン草は越冬栽培が可能な中国産種子、葱は「明水葱」と「蓋平葱」、カボチャと胡瓜は早生種の中国産種子、茄子は早生種を除いては中国産種子が珍重されていた。²⁹中国産大根品種は朝鮮在来種よりその質が極めて緻密で硬く、食味も劣り漬物には向いていなかったが、簡単容易に貯蔵できる特性を有していた。³⁰このような理由で朝鮮では中国から少なくない野菜種子を輸入していた。日本から毎年約三〇〇四〇万円の種子が移入されて最も多かったが、中国からは約一十万円を輸入していた。³¹この輸入額には中国農民が山東省などより携帯して来る種子が含まれていないため、実際の輸入額は一十万円をはるかに超えていたと考えられる。

以上のような中国農民の野菜栽培における五つの特徴と、中国農民の質素な生活は、生産した野菜の「売価較廉」^⑫（売価が比較的廉価）と「出品肥美」^⑬（品質優秀）をもたらし、朝鮮及び在朝日本農民の野菜栽培よりも比較優位に立つことが出来たのである。

第二節 販売ネットワーク

野菜の販売は栽培と同様に重要である。いくら優良な野菜を生産してもその販売がうまくいかなければ、野菜の「生産―販売」の好循環は生まれないためである。自家消費ではなく専ら商業用の野菜栽培を行う中国農家にとっては生産した野菜の安定的な販売網の確保は朝鮮農家より一層求められていたと考えられる。

富仁地域の中国農家が栽培した野菜がどのように販売されたかを見よう。同地の中国農家栽培野菜の八割は仁川府内里と新町にある野菜市場を通して販売された。^⑭ 仁川府新町の野菜市場は一九二四年現在で敷地二二〇坪に木造亜鉛葺の建物で、中国野菜商が建物内に売台を設けて野菜を卸売り及び小売をし、^⑮ 朝鮮及び日本農民は栽培した野菜をこの市場の中国野菜商に委託して販売するなど、中国野菜商が野菜販売を独占していた。

中国野菜商がこの野菜市場で独占的に野菜販売をするようになった経緯は次の通りである。この市場が出来る前、仁川には野菜市場がなく、毎朝日本人と中国人が路上に野菜を並べて小売するか、朝鮮人が集まって小売する、いわば露店しかなかった。^⑯ 中国農民は、野菜市場の建物がなく一定しないため取引がとても不便であることに着目して、仁川府新町の中国人陳徳興所有の建物で野菜を販売したのが、新町の野菜市場の始まりであった。^⑰

一九一二年に富仁地域に仁川農業公議会ができると、この組織が同建物を野菜市場として管理した。一九二三年頃に出店する中国農家は出盛り期には七〇戸、冬季閑散期には約二〇戸に達した。^⑱ しかし、この野菜市場は一九二六年に仁川府の公設市場になって中国野菜商による独占販売が危ぶまれたが、同会と仁川領事館が同府と交渉した結果、中国野菜商二

○戸が同府より販売権を得て、引き続き富仁地域の中国農民と朝鮮及び日本農民生産の野菜を独占販売することが出来た。同会は一九二三年頃に会員から徴収した会費から新町の野菜市場に月に五〇円、内里の野菜市場に同二五円を各々の建物所有主に支払っていた。^⑪同会は一九二二年に約一三〇戸の中国農家で始まったが、一九二九年には約二百戸に増加し、同会の幹部は董事一名、班頭（評議員）九名、各地域別に牌頭（組長）を置いて農家を管理していた。^⑫会員の会費は一九二二年には月に〇・六円、一九二三年には〇・八円、一九一四年から一・〇円、一九二六年から一・二円、一九二九年一月から一〇月までは一・〇円であった。^⑬

この野菜市場を通じた富仁地域の中国農民生産の野菜販売状況は、仁川商業会議所による調査によれば、一九二三年の一年間で新町と内里の野菜市場において販売された野菜は五万一、四三九円であった。^⑭主な販売野菜は、大根八、一六〇円、サツマイモ五、七六〇円、白菜五、五〇〇円、葱五千円、茄子四、五〇〇円、瓜（まくわうりとかぼちゃなど）四、四〇〇円、胡瓜三、七五〇円、水菜三、九〇〇円、キャベツ二、五〇〇円、牛蒡一、六五〇円、里芋一、〇五〇円、真菊一千円、ホウレン草七二〇円であった。この売上額のうち日本及び朝鮮農家からの野菜委託販売は全体の四％（二、五〇〇円）に過ぎず、九六％は中国農民生産の野菜であった。

なお、新町市場で販売された野菜は大根、白菜だけでなく、日本人の好む葱、茄子、かぼちゃ、胡瓜、牛蒡などの野菜も多かったことに気づく。当時、朝鮮内で自給自足出来る野菜は白菜、芹、マッカ瓜、越瓜、ニンニク、菜豆、紫蘇、茼蒿、青唐辛子の九種類に過ぎず、中国農家が栽培する野菜は朝鮮内で供給不足の野菜が多かった。

仁川農業公議会のような販売組織は元山府にもあった。元山副領事館は元山府の中国農民生産の野菜が日本商人によって販売を操縦されていた状況を改善して中国農民の利益を保護するため、元山府尹と協議して京町公設市場に数百坪の区画を設け、専ら中国農民生産の野菜を販売できるように要請して後藤府尹より許可を得た。^⑮同領事館と国民党元山支部は同販売所の運営のため、一九三三年九月に「元山華僑野菜販売社」を設立し、同販売社は一九三五年初めには中国農家八

六戸と職員一名で構成されていた。年間の会費は仁川農業公議會のように一律にせず、五等級に分けて徴収された。

鎮南浦府の場合は、中国農耕業主四名が常設市場の一部を借り受けて野菜を販売していたほか、朝鮮の在来市場に販売する農耕業主は一日平均七〇名に達するほど多かった^{④7}。京城府の場合は、府内と高陽郡、始興郡の中国農耕業主は旭町の京城食糧品市場及び南大門市場に野菜を搬入し、一九二三年頃の出盛り期には毎日約五〇名、閑散期には約二〇名が年間約五万円の野菜を販売していた^{④8}。

しかし、中国農家の野菜販売は朝鮮全体としては常設市場を通じた販売よりも中国行商による販売がより一般的で、「朝鮮内に於ける野菜行商中断然たる優勢を占め殆ど独占状態^{④9}」にあった。行商には中国農民が栽培した野菜を直接行商する場合と、中国専門行商が中国農家などより野菜を買い付けて行商する場合の二つの形態があった。なお後者の行商は個人的に販売する小規模の行商と、「自己の店舗を有して小額出資者又は店員をして小売に従事せしむる」行商があった^{⑤0}。自己の店舗を有する中国野菜果物販売業主は朝鮮内で一九三〇年に四八六名（戸）あって、朝鮮人六、二一六戸にははるかに及ばないが、日本人二四六戸を上回っていた^{⑤1}。京城府には中国野菜果物販売業主が六四戸（同府全体の八・八％）、日本人二六戸（同三・六％）、朝鮮人六四一戸^{⑤2}、仁川府には中国人三八戸（同府全体の三・六％）、日本人七戸、朝鮮人六一戸であった^{⑤3}。

これらの野菜販売業主の従業員として、或いは個人的に行商を行う中国人は、朝鮮内で一九三〇年に一、九八四名に上り、朝鮮人の行商よりは少ないが、日本人二四六名をはるかに上回った。京畿道の中国行商は六七四名で朝鮮内中国行商の三四％を占めて最も多く、そのうち京城府に五九七名（朝鮮人は一、一二六名、日本人は四名）、仁川府に七六名（朝鮮人は一、四〇八名、日本人は一六名）であって、とりわけ京城府に中国野菜行商が集中していた。同府の中国野菜行商は日本人及び朝鮮人上流層の顧客をつくり、野菜籠で野菜を一戸一戸訪問して販売していた。

朝鮮人随筆家の崔以権は当時京城の中国野菜行商について次のように述べた。「雨が降っても風が吹いても一日もかか

さず真面目に毎日朝我が家を訪ねてくる中国野菜行商があった。：毎日重い野菜籠を担いできて一銭二銭換えていくことだけ知っていたが、ほかにも私は彼から見たことがある。汗をかきながらも指が凍って破れても一日もかかず、熱心と真面目で行商しながら金稼ぎに余念がない表情を、銅銭一銭でも自分の力で稼ぐ、それを貴く思い、節約する姿を。そして自分の仕事に力を尽くしながら嫌気を見せず、かえって大きな希望に満ちて満足して生きているような顔を」。

このような中国野菜商の増加は、京城公設市場の野菜市場の売上額を減少させるほど強い勢力を形成し、一九三〇年代初めには中国野菜商の販売額は約二〇万円に上り、京城府内の野菜消費額の約一割を占めていた。

要するに、中国農家栽培の野菜は主に中国人野菜販売ネットワークを通して円滑に販売され、中国農家の野菜生産を促進する役割を果たしていたといえる。

- ① 「中国人の蔬菜業者」『東亜日報』一九二四年一月一七日。
- ② 「中国人の蔬菜業者」『東亜日報』一九二四年一月一七日。
- ③ 西水孜郎「朝鮮の農村に於ける土地利用」『地理学評論』第十二号（日本地理学会、一九三六年）二四頁。
- ④ 小田内通敏（一九二五年）三三頁。
- ⑤ 恩田鉄彌（一九〇九年？）四九頁。
- ⑥ 斎藤茂「平壤附近に於ける直隸白菜栽培状況」『朝鮮農会報』第六卷第二号（朝鮮農会、一九三二年二月）七三頁。
- ⑦ 西水孜郎（一九三六年）二五頁。
- ⑧ 小田内通敏（一九二四年）四八頁。それが問題になったことがある。新義州府彌勒町の住民四〇名は、一九三五年六月初めに同府衛生課に対して、中国農民が野菜栽培のために作っておいだ人糞溜池から悪臭が発散するのを取り締まるように陳情した。「中国人野菜田刈人糞使用禁止陳情」『朝鮮日報』一九三五年六月七日。
- ⑨ 小田内通敏（一九二五年）三六頁。
- ⑩ 一九三〇年六月二十五日発、仁川中華農業公議会議事王承調稟文「仁川農会紛糾案」『駐韓使館保存檔案』（同〇三―四七、一九二―〇三三）。小田内通敏（一九二五年）三三頁。
- ⑪ 小田内通敏（一九二四年）四八頁。
- ⑫ 西水孜郎（一九三六年）二六頁。
- ⑬ 小田内通敏（一九二四年）四七頁。春野菜にはホウレン草、葱、芹、夏野菜には茄子、胡瓜、甜瓜、トマト、夏大根、葱、甘藷、馬鈴薯、秋冬野菜には大根、白菜、蕪菁、人參、牛蒡、玉葱、根深葱、山芋、里芋を栽培していた。
- ⑭ 恩田鉄彌（一九〇九年？）四九頁。
- ⑮ 「中国人の蔬菜業」『東亜日報』一九二四年一月一四日。
- ⑯ 野木伝三「朝鮮の蔬菜栽培に就いて（下）」『朝鮮農会報』第九卷第三号（朝鮮農会、一九一四年三月）一七頁。
- ⑰ 朝鮮総督府（一九二四年a）一〇九頁。
- ⑱ 華僑楊春祥氏（八一歳）の証言。彼は一九四三年頃に山東省より

- 海州に移住して同地で解放直後暫く野菜行商を行った。二〇一〇年五月四日、大邱広域市の自宅にてインタビュー。구선희의 (二〇〇七年) 三七八―三七九頁。
- 19 一九三三年四月五日収、駐仁川辦事処暫代主任張義信稟文「仁川公設市場之菜類販売権」(同上檔案)。
- 20 召령畧外「中国山東省의 菜蔬類生産、流通、輸出現況과展望」(韓國農村經濟研究院、二〇〇四年) 一五頁。
- 21 齋藤茂「平壤地方に栽培される支那産蔬菜に就いて」『朝鮮農會報』第九卷第三号(朝鮮農會、一九三五年三月) 二〇頁。
- 22 一九三三年五月二六日發、朝鮮週報社ヨリ京城總領事館宛「請査示中国優良菜種名称及産地」『駐韓使館保存檔案』(同〇三・四七、二一八―一七)。
- 23 京城府庁『昭和十四年度京城府中央卸売市場年報』(京城府庁、一九四一年) 一〇九―一二頁。
- 24 李智鉉「農業技術 蔬菜栽培法」『農民』第一卷第四号(朝鮮農民社、一九三〇年八月) 一五頁。
- 25 恩田鉄彌(一九〇九年?) 二二頁。
- 26 山口豊正(一九一一年) 一五五頁。恩田鉄彌(韓國に於ける果樹蔬菜栽培法(接前))『朝鮮』第三卷第五号(朝鮮雜誌社、一九〇九年七月) 七三頁。
- 27 指宿武吉「清國に於ける蔬果評論(其二)」『韓國中央農會報』第三卷第七号(韓國中央農會、一九〇九年七月) 三〇頁。指宿は中國には優良な野菜種子が多く存在しているにもかかわらず西洋の種子に心酔している日本の姿勢を批判し、優良な中國産種子を積極的に導入することを促した。指宿武吉「清國に於ける蔬果評論(其一)」『韓國中央農會報』第三卷第三号(韓國中央農會、一九〇九年三月) 三九―四〇頁。
- 28 齋藤茂(一九三二年二月) 六六―六七頁。
- 29 齋藤茂(一九三五年三月) 二一―二五頁。
- 30 小濱喜太郎「朝鮮大根の改良について」『朝鮮農會報』第十三卷第六号(朝鮮農會、一九三九年六月) 三八頁。
- 31 「野菜種子不足増産計劃에 支障不少」『東亞日報』一九三八年八月九日。
- 32 中国農民は「粗衣粗食ニ甘シ他ト一切交際ヲしないため、朝鮮農民及び日本農民より相対的に生活費がかからなかったという。恩田鉄彌(一九〇九年?) 四九頁。
- 33 一九三三年四月五日収、駐仁川辦事処暫代主任張義信稟文「仁川公設市場之菜類販売権」(同上檔案)。
- 34 一九三一年五月、駐新義州領事館報告文「駐在地華僑之農工商各業及散在各地之僑民戸口」『南京国民政府外交部公報』第四卷第一号(同上資料) 五三頁。
- 35 「仁川野菜狀況土産」『大韓中國人の손』『東亞日報』一九二四年四月二〇日。
- 36 朝鮮總督府「朝鮮の市場」(調査資料第八輯)(朝鮮總督府、一九二四年b) 二九三―三〇一頁。
- 37 恩田鉄彌(一九〇九年?) 四頁。
- 38 一九三〇年七月三日發、駐清津領事稟文「仁川農會紛糾案」(同上檔案)。
- 39 「仁川野菜狀況土産」『大韓中國人の손』『東亞日報』一九二四年四月二〇日。
- 40 一九三三年四月四日發、駐仁川辦事処暫代主任張義信稟文「仁川公設市場之菜類販売権」(同上檔案)。
- 41 朝鮮總督府(一九二四年a) 一〇九―一一〇頁。
- 42 一九三〇年六月二五日發、仁川農業公會議事主承調稟文「仁川農

会紛糾案」(同上档案)。

④3 一九三二年一月二日収、仁川中華農會執行委員會呈文「仁川農會改組及賑捐」『駐韓使館保存档案』(同〇三・四七・二〇五・〇一)。

④4 「仁川野菜状況土産」大概中国人의 손으로『東亞日報』一九二四年四月二〇日。朝鮮總督府(一九二四年a)一一〇〜一二頁。この売上額は大口の取引及び仕入れ額を概算したものであり、卸売りと小売を合計した金額はそれを上回る六万二、七九〇円に上った。

④5 小林林蔵「京城人の嗜好から見た蔬菜と果実」『朝鮮農會報』第一〇卷第八号(朝鮮農會、一九三六年八月)五〇頁。

④6 一九三五年三月九日編、駐元山副領事館報告文「元山僑務之概要」『南京国民政府外交部公報』第八卷第三号(同上資料)七六〜七七頁。

④7 朝鮮總督府(一九二四年a)一七二頁。

おわりに

本稿では在朝中国農民の野菜栽培の実態について朝鮮開港期から一九二〇年代までの時期を対象として京畿道を中心に考察してきた。ここで考察した内容を簡単に振り返った後、中国農民の野菜栽培が朝鮮近代史及び朝鮮華僑史に示唆することは何かについて考えてみたい。

まず第一章では、中国農民の野菜栽培面積、野菜生産額の推計を行った上で、中国農民は大都市及び地方の主要都市の野菜供給において高い比重を占めていたこと、それに対して朝鮮人社会と在朝日本人は警戒感を抱いていたことを明らかにした。

続く第二章では、なぜ中国農民が野菜栽培に相当な勢力を形成するに至ったかを探るため、まずその生成過程及び中国農民の朝鮮移住の背景について分析を行った。その結果、在朝中国農民の野菜栽培は日本人より早い一八八七年頃に仁川

④8 朝鮮總督府(一九二四年a)六八〜六九頁。

④9 文定昌「朝鮮の市場」(日本評論社、一九四一年)一一四頁。

⑤0 京城商業會議所「調査 朝鮮の対支經濟關係概況」『朝鮮經濟雜誌』第一三九号(京城商業會議所、一九二六年七月)八頁。

⑤1 朝鮮總督府(一九三三年a)二五八〜二五九頁。

⑤2 朝鮮總督府(一九三三年b)二二八〜二二九頁。

⑤3 朝鮮總督府(一九三三年b)二四八〜二四九頁。

⑤4 崔以權「中国野菜商人」『東光』第三五号(東光社、一九三二年七月)六七〜六八頁。

⑤5 「市場売上高激減中国人販売人増加呈」『朝鮮日報』一九二八年二月九日。

⑤6 京城商業會議所(一九二六年七月)八頁。

附近で始まり、在朝日本人などの人口増加に伴う野菜需要の増加と朝鮮農民による野菜供給不足という条件の下で中国農民の野菜栽培が朝鮮内に広まったこと、在朝中国農民は山東省の東沿岸地区出身者が多く年齢は二〇代から四〇代が相対的に多かったこと、移住の理由は山東省の経済的貧困というプッシュ要因よりも朝鮮で野菜栽培をすれば高い収益を得られるという見込み、即ち朝鮮でのプル要因が強かったことを明らかにした。

第三章では、中国農民生産の野菜が朝鮮及び在朝日本農民が生産する野菜より割安で品質優秀であった原因について分析した。中国農民の野菜栽培の特徴は勤勉さ、豊富な自然肥料の使用、集約的な野菜栽培、優れた野菜栽培技術、優良な中国産種子の使用であることを見た。なお中国農民生産の野菜は中国人の野菜販売ネットワークに支えられて円滑に販売されたことが中国農民の野菜栽培を促進させたことを明らかにした。

以上のような考察結果は、朝鮮近代史及び朝鮮華僑史に以下のような示唆を与えることが出来る。朝鮮近代史の研究では従来「停滞性論」対「内在的發展論」、「植民地収奪論」対「植民地近代化論」という対立構図を軸に展開されてきたために、主要な研究対象は支配側の日本帝国主義及び在朝日本人、および被支配側の朝鮮人に集中し、在朝中国人を朝鮮近代史に取り込もうとする試みはほとんどなされてこなかった。しかし、本稿によって在朝中国人は朝鮮近代史に議論されるべき対象として十分に値することが提起されたであろう。すでに筆者は別稿で植民地期の在朝中国人が商業（とくに織物商）、鑄物業、靴下製造業の部門で在朝日本人及び朝鮮人に匹敵する勢力を形成していたことを明らかにした。^①このような検討結果に基づいて考えるならば、在朝中国人は朝鮮近代史に従来とは異なる新たな観点を提供し、朝鮮近代史の地平を広げてくれる良い研究対象ではないだろうか。

他方、本稿は在朝中国人の新しい経済活動を明らかにしたことで中国商人に偏重していた朝鮮華僑史の内容をより豊かにしたと考えられる。なお在朝中国農民のような野菜栽培活動は戦前の在日中国人にはあまり見られない事例であるが、前述の極東ロシアと、東南アジアに在住する中国人には見出され、^② 今後は在朝中国農民、在極東ロシア中国農民と在東南

アジア中国農民の比較検討も視野に入れた、幅広い近代海外中国農民研究が必要とされよう。^③

最後に、在朝中国農民の野菜栽培は一九三一年から一九四五年までの時期に様々な挑戦に直面するが、それに関しては稿を改めたい。

① 拙稿（二〇〇八年）。拙稿（二〇〇九年a）。拙稿（二〇〇九年b）。拙稿（二〇〇九年c）。

② とくに在英領馬來、在タイ中国農民による野菜栽培が盛んに行われていた。企画院編纂『華僑の研究』（松山房、一九三九年）一五四頁。満鉄東亞經濟調査局『英領馬來・緬甸及溼洲に於ける華僑』（満鉄東

亞經濟調査局、一九四一年）一六九―一七〇頁。

③ 近代世界華僑華人研究は華商、華工、アイデンティティ問題に関わる研究が相対的に多く、華農に関する研究は非常に手薄である。福岡久一編『華人・華僑関係文献目録』（アジア經濟研究所、一九九六年）。

【附記】 本稿作成にあたり、京大人文研の「移民の近代史」研究班の水野直樹氏、長沢一恵氏と、韓国仁済大学の朴ソプ氏から貴重なコメントを賜った。最後に記して謝意を表明する。

（成美大学教授）

A Study of Vegetable Cultivation of Chinese Farmers in Modern Korea, Using Gyeonggi-do as a Case Study

by

YI Jung-hee

This article considers the circumstances of vegetable cultivation by Chinese farmers in Korea, and particularly Gyeonggido, from the period of the opening of the nation's ports to the 1920s.

Based on estimations of the area devoted to vegetable cultivation by Chinese farmers and the value of vegetable production, the first section of this article clarifies the fact that Chinese farmers were responsible for a large percentage of the supply of vegetables to the metropolitan areas and regional cities and that the Korean people and Japanese residents were alarmed by this fact.

In the following, second section, which explores how the considerable power was gained by Chinese vegetable cultivators in Korea, I first analyze the process of growth and the background of Chinese immigrant farmers to Korea. As a result, I have made clear that vegetable cultivation by Chinese farmers began in the Incheon area around 1887, earlier than that of the Japanese, that vegetable cultivation by Chinese farmers spread throughout Korea with the increase in demand for vegetables that accompanied the increase in Japanese and other immigration and the inability of Korean farmers to fill the supply needs, that many of the Chinese farmers in Korea were from the east coast of Shandong and the percentage in 20-40 year-old age group was relatively high, and that the motivation for immigration was the prospect of obtaining large profits cultivating vegetables in Korea rather than poverty in Shandong and thus it was the attraction of Korea, the pull rather than the push, that was the major cause.

In the third section I analyze why the vegetables produced by Chinese farmers were less expensive and better quality than those produced by Korean or Japanese farmers. Special characteristics of vegetable cultivation by Chinese farmers were their diligence, generous use of natural fertilizers, concentration on vegetable cultivation, superior techniques in vegetable cultivation, and the use of high-quality seeds produced in China. I also make clear that the vegetables produced by Chinese farmers were supported by a network of

Chinese vegetable dealers resulting in smoothly handled transactions that promoted vegetable cultivation by Chinese farmers.

The results of the above considerations are suggestive for the study of modern Korean history and the history of overseas Chinese in Korea. The main topics of modern Korean history have been concentrated on the rulers, i.e. Japanese imperialism and Japanese in Korea, and the ruled, i.e. the Korean people, and there has been little or no effort to incorporate the Chinese in Korea into modern Korean history, but this article has proposed that the Chinese people in Korea are fully worthy of becoming a topic in the study of modern Korean history. Moreover, studies of the overseas Chinese in Korea have been weighted toward Chinese merchants, but due to this article it is now clear that the overseas Chinese community in Korea was much more varied.

The *Zappo Chokkyo* in the Mid-Heian Period

by

SATO Sakiko

In this study I have attempted to examine the *shoden sei* 昇殿制 (a system that allowed aristocratic officials with imperial permission to approach the emperor in the elevated portion of a building in which the emperor was present) and the character of aristocratic society by clarifying the distinctive features and the process of formation of the *zappo chokkyo* 雜袍勅許 in the mid-Heian period. Heian aristocrats were required, in principle, to wear formal dress, *sokutai* 束帶, when they were in attendance at the imperial palace. The *zappo chokkyo* was an imperially conferred privilege that allowed one to go to wear informal dress, *noshi* 直衣, instead of the *sokutai*, when at the palace.

The *shoden sei* developed during the reign of Emperor Uda. In this respect, it can be said that the system became “official and public” in that time, but it was still considered as “private” in a sense because unlike “official” service in a government post it was based on a “private” relationship with the emperor. The *zappo chokkyo* began as a part of the development of the *shoden sei* as it was bestowed on aristocrats who had received the *shoden* privilege. It allowed wearing either the *zappo no sokutai*, a formal costume over which a private jacket could be worn in place of an official one, or the *kaigu no noshi*, the